

# 二字漢語の日中対照

——「参考」「参照」を手がかりに——

吉 田 雅 子

## 1 はじめに

日本語教育の場において、中国人に漢語(日本語)を教えるのは、易しいようで意外に難しい。同形語が同じ品詞で同じ意味に使用されるならば問題は無いが、その成り立ちは一様ではない。さらに、日本語では、はじめにサ変動詞で使われ、現在は名詞に使われるようになった漢語もあり、それが、中国語では動詞に使われている場合、留学生は、不適切な「名詞＋する」を使いがちである。このような間違いを減らすために、日中同形語の品詞分析が、日本語教育に役立つのではないかと考えたのが、本稿のきっかけである。

## 2 「参考」と「参照」

「参考」は、現代の日本漢語では、主に名詞に使われており、「いろいろ他のものと引き比べ自分の考えを決める手掛かりにすること。またその手がかり」(『日本国語大辞典 8』小学館)という意味になる。

この語は、古くは、『漢書』に、「唯陛下觀覽古戒，反復參考，無以先入之語為主」(『広漢和辞典』大修館書店)とあり、また、俳諧、隨筆にも用例があり、さらに、「緒言を参考して趣意の在る所を探り」という福沢諭吉の用例がある。

夏目漱石の『吾輩は猫である』では、「参考の爲め、一寸聞いて置きたいが<sup>8</sup>」に使用され、これは「名詞＋ノ」で目的を表わす用法だと考えられ

る。

さらに、『日本語を学ぶ人の辞典』(1995, 新潮社)で「参考」を引くと、「この資料を参考に、論文をまとめる//京子の意見はとても参考になる//参考文献」が用例としてあげられ、「参照」は「年表を参照しながら、歴史小説を読む」の用例があげられている。岩波国語辞典(第四版)では、「参考」は「～する」,「他動詞」である。

また、中日辞典では、次のように意味記述されている。

【参考】 動 1 参考にする(関係資料を) 2 参考にする(理解を助けるために) 3 参照する

【参照】 動 参照する(経験・状況などを)

【参看】 動 1 参考に見る(別の文章を) 2 文章の注釈用語, 参照する

以上、見たように、日本語と中国語で似たような意味を持ち、辞書にも「する」がつけられながら、実際には、「参考」のように、名詞として使われている場合、どうしても「参考してください」のような、留学生の誤用を生む結果となる。

【参照】は、飛田良文によって、和製漢語に組み入れられているし、【参照】【参看】は、『漢語外来詞詞典』では、日本からの借用語に入れられている。

### 3 和製漢語の基準

陳力衛(2001)第五章二,「中国語における和製漢語受容のルートと媒介」では、以下のように述べられている。

第四章にも述べたように、近代後においては、前期では漢訳洋書や英華辞典など中国から日本への流入が主流になっているが、後期では日本から中国へと流れていく。このサイクルは近代以降の日中同形語をもたらし最大の要因になっている。(略)

中国では、これらの日本伝来の新漢語を外来語として捉えようとする議論が活発化している。中国語学者たちは、中国語の中にどれぐらい日本からの借用語があるかをめぐって研究を続けてきた。(略)

結果的に今日では劉正琰・高名凱などの『漢語外来詞詞典』の約八百語に集約されるようになるが、しかし、これらの研究においていわゆる借用語の認定課程に関する資料がほとんど提示されておらず、恣意的な判断によるところが少なくないため、最近の研究によって間違いを指摘された語が数多くある。

その流入の時期について、沈国威(1994)は、「研究の進展によって日本語語彙の流入時期は明治初期まで遡らなければならないと考える。」と述べている。

山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』(1940)には、狭義の「和製漢語」は、「漢語と同じく漢字を用ゐてそれを音読するものなれども、それは本来の漢語にあらずして本邦にてつくれるものをさす」と記されている。それに対し広義の捉え方は、時代を問わず、とにかく日本的な意味の発達や使い方、あるいは日本で新しく造られたものを全部含んでいる。

さらに、陳力衛は発表用レジメ(2004)で、日本の漢字表記語の定義と範囲を次のように述べている。

「「新漢語」と関わってくる概念は少なくとも由来から見てさらに「近世中国語」⑤、「訳語」⑥⑦⑧⑨、「和製漢語」⑩⑪⑫に分けられる」。「中国からの直接使用は、⑤⑥で、中国の古典語を用いて外来概念を訳すための転用が⑦⑧⑨、外来概念にあてゐるため、日本人独自の創出が⑩⑪⑫である」と述べ、特に中国からの直接使用の⑤⑥に関しては、今まできちんと見極められてこなかったことを指摘している。

これらの分類において、例にあげられている語彙を抜き出してみると次のようになる。

⑤中央、分離、活動、主張、喫煙、純白

- ⑥電報，鉄道，銀行，保険，権利，工業，化学
- ⑦細胞，生産，生理，水質，運動
- ⑧自由，文学，精神，思想，小説
- ⑨経済，主義，社会，文化，芸術，革命
- ⑩電話，哲学，美術，主観，止揚，象徴
- ⑪情報，番号，警察，表現，改善，異動
- ⑫目的，故障，出版，文盲，調整，指向

さらに、中国語の漢訳仏典に由来し、日本語として近代後の概念で使われるようになった語彙の例として、「印象」をとりあげて説明している。このように、一つの語彙が意味を広げるには、時間と広がる場所を必要とする。「いんぞう」から「印象派」までの距離は、語彙の時間的な幅と、流布する広さを物語るものである。

#### 4 『現代漢語外来詞研究』に収められている和製漢語

『現代漢語外来詞研究』の第三章「現代漢語的外来詞」第五節、「日本語来源的現代漢語外来詞」に引かれている語彙を抜き出し、品詞別に整理してみると次のような結果となった。

【中国語——日本語 [互いの関係を (あ) から (を) に分類]】

- 1 名詞——①名詞 (あ)，——②名詞・ス自 (い)，——③名詞・ス他 (う)，——④名・ス自他 (え)，——⑤名・ナ・ノ (お)，——⑥× (か)
- 2 名詞／動詞——①名詞 (き)，——②名・ス自 (く)，——③名・ス他 (け)
- 3 名詞／形容詞——①名詞 (こ)，——②名詞・ナ・ノ (さ)，——③名詞・ダナ (し)
- 4 動詞——①名詞 (す)，——②名詞・ス自 (せ)，——③名詞・ス他

- (そ), ——④名詞・ス自他 (た) ——⑤名詞・ス自ダ (ち), ——⑥動詞 (つ), ——⑦× (て)
- 5 動詞／名詞——①名詞 (と), ——②名詞・ス自 (な), ——③名詞・ス他 (に), ——④名詞・ス自他 (ぬ)
- 6 動詞／形容詞——①名詞 (ね), ——②名詞・ス自 (の), ——③名詞・ス他 (は), ——④名詞・ス自他 (ひ)
- 7 動詞／形容詞／名詞——名詞 (ふ)
- 8 動詞／形容詞／副詞——名詞・ス他 (へ)
- 9 形容詞——①名詞・ス自 (ほ), ——②名詞 (複合) (ま), ——③名詞・ナノ (み)
- 10 形容詞／名詞——名詞・ナノ (む)
- 11 副詞／形容詞——名詞 (め)
- 12 ×——名詞 (も)
- 13 前置詞／名詞——名詞 (や)
- 14 略——名詞 (ゆ)
- 15 ×——× (よ)
- 16 動詞／名詞／形容詞——名詞 (わ)
- 17 形容詞／副詞——副詞・ダ・ナノ (を)

また、これらの分類に該当する語彙を抜き出してみると次のようになる。

- (あ) 1 場合 2 場面 3 場所 4 便所 5 備品 6 舞台 7 道具 8 副食物 9 保健 10 方針 11 権威 12 身分 13 目標 14 内容 15 玩具 16 支部 17 市場 18 支店 19 症状 20 集団 21 宗教 22 倉庫 23 手続 24 話題 25 要素 26 要点 27 文学 28 文化 29 文法 30 物理 31 鉛筆 32 学士 33 博士 34 方面 35 法律 36 表象 37 住所 38 階級 39 環境 40 課程 41 権利 42 機会 43 機関 44 構造 45 共和 46 政治 47 社会

48手段 49主席 50主食 51美学 52美術 53傍証 54代数 55瓦斯  
 56電報 57伝票 58電流 59電車 60電信 61動議 62動向 63動脈  
 64導体 65学位 66学期 67学齡 68劇場 69現象 70原則 71議案  
 72議員 73議会 74技師 75軍事 76背景 77偏見 78法学 79法則  
 80医学 81意志 82人格 83情報 84条件 85蒸気 86静脈 87化学  
 88海事 89潰瘍 90干部 91借方 92貸方 93刑法 94警察 95結核  
 96企業 97金庫 98光線 99脚本 100目的 101瀝青 102歴史  
 103列車 104領土 105領域 106領海 107領空 108流体 109索引  
 110算術 111左翼 112成分 113政府 114政策 115政党 116社団  
 117新聞 118信号 119消防 120商業 121商品 122職員 123主義  
 124周波 125主権 126週期 127宿舍 128主任 129体育 130体積  
 131対象 132単位 133鉄道 134哲学 135特権 136特徴 137特務  
 138右翼 139要衝 140財閥 141財団 142財務 143材料 144財政  
 145前提 146体操

(い) 1 勤務 2 故障 3 浪人

(う) 1 会計 2 講義 3 信用 4 概論 5 意図 6 総理 7 提案  
 8 定義

(え) 1 観念

(お) 1 直覚 2 三角

(か) 1 美感 2 法庭 3 曹達

(き) 1 思想 2 予算 3 電力 4 命題 5 定額

(く) 1 交通 2 関係

(け) 1 経験 2 意味 3 計画 4 代表 5 意識

(こ) 1 文明 2 機械 3 規則 4 物質 5 概念 6 現役 7 現実  
 8 義務 9 科学 10 客観 11 系統 12 民主 13 主観 14 数学

(さ) 1 経済

(し) 1 自由 2 自然

- (す) 1 見習 2 作戦 3 取締 4 打消 5 遊撃 6 互惠 7 自治  
8 仮死 9 専売 10 出超
- (せ) 1 服従 2 服務 3 説教 4 出席 5 退却 6 停戦 7 抗議  
8 交渉 9 流行 10 断交 11 談判 12 伝播 13 独裁 14 破産 15 蒸発  
16 交流 17 休戦 18 進化 19 退化 20 対応 21 投票 22 特約
- (そ) 1 調整 2 複写 3 復習 4 破門 5 交換 6 克服 7 内服  
8 認可 9 節約 10 支配 11 執行 12 侵害 13 処刑 14 総計 15 体験  
16 分析 17 演説 18 風刺 19 議決 20 改造 21 支持 22 美化 23 調整  
24 仲裁 25 代理 26 動員 27 独占 28 演繹 29 配給 30 迫害 31 判決  
32 批評 33 批判 34 否決 35 否認 36 放送 37 表決 38 自白 39 蒸留  
40 改良 41 回収 42 改善 43 管理 44 官制 45 拘留 46 局限 47 供給  
48 免除 49 緑化 50 請願 51 制裁 52 制約 53 侵犯 54 侵蝕 55 消毒  
56 消費 57 承認 58 出版 59 即決 60 総合 61 提供 62 偵察 63 登記  
64 予約
- (た) 1 停止 2 展開 3 解散 4 消化
- (ち) 1 交際 2 反対
- (つ) 1 引渡
- (て) 1 表演
- (と) 1 例外 2 表情 3 過渡 4 組合
- (な) 1 労働 2 運動 3 反映 4 反応 5 作用
- (に) 1 貯蓄 2 表現 3 希望 4 記録 5 命令 6 連想 7 請求  
8 申請 9 想像 10 保障 11 経理 12 検討 13 教育 14 教授 15 領会  
16 断定 17 概算 18 判断 19 放射 20 保釈 21 保証 22 鑑定 23 仮設  
24 建築 25 説明 26 試験 27 対比 28 展望
- (ぬ) 1 解決 2 復員 3 反射 4 交易 5 集合
- (ね) 1 相対
- (の) 1 接近 2 進歩

- (は) 1 抽象 2 概括 3 否定 4 帰納 5 公開
- (ひ) 1 集中
- (ふ) 1 具体 2 投機
- (へ) 1 肯定
- (ほ) 1 個別 2 共同
- (ま) 1 初步 2 封建 3 唯一 4 法定 5 無機 6 積極 7 消極  
8 対称 9 有機
- (み) 1 特殊
- (む) 1 必要 2 反動
- (め) 1 故意 2 絶対
- (も) 1 下駄 2 内用 3 但書 4 法式 5 脱党 6 動産 7 液体  
8 法人 9 金額 10 雇員 11 特許
- (や) 1 距離
- (ゆ) 1 作物
- (よ) 1 電業 2 法科 3 出訴 4 出庭 5 得数
- (わ) 1 芸術 2 保険 3 革命
- (を) 1 特別

## 5 日本語と中国語の品詞関係(『現代漢語外来詞研究』)

4 の分類において、特徴があると思われる箇所について、その関係を見  
てみることにする。

(1) 日本語では名詞で、中国語では形容詞

「個別」「初步」「唯一」「封建」「法定」「積極」「消極」「対称」「有機」。この中で、「消極」を除いて、すべて「非述形容詞」である。「積極」は、「非述形容詞」でもあり、述語にも使われている。また、『現代漢語外来詞研究』には収められていないが(『漢語外来詞詞典』にも収録されていない)、「無機」も「非述形容詞」である。



このほか(め)にある「故意」「絶対」も「非述形容詞」である。「絶対」や「相対」は『哲学字彙』(1881)にみられる日本独自の翻訳語であると陳(2001)は述べている。

「消極」について見てみると、辞書には、例文1「這種論点太消極了，我不賛成」，例文2「他近来很消極」で、意味は、1「そういう論点は悲観的すぎて、私は賛成できない」，2「彼は近ごろ引込みがちである」になっている。「個別」や「法定」のように、まったく「非述」の場合と、「積極」のように「非述」と「一般形容詞」の両者、「消極」のように、述語の地位を既に獲得しているものなどがある。

(2) 日本語では名詞で、中国語では動詞

「見習」「作戦」「取締」「打消」「遊撃」「互惠」「自治」「仮死」「専売」のうち、和製漢語構造分析(沈国威, 1994)によれば、修飾関係の「v+v」か「m+v」の組み合わせに入る。

(3) 既に使われなくなったと考えられる語

「電業」「法科」「出訴」「出庭」「得数」これらは、日本語の辞書(岩波4版)にはみられず、中国語の辞書(白水社, 東方, 応用)にも載っていない語彙である。この中で、「電業」と「法科」はパソコンでは変換される語彙であり、「出庭」は「出廷」の同音字と考えられる。

(4) 日本語の辞書には、まだ使われている(名詞)が、中国語としては、既に使われなくなった可能性がある語彙

「内用」「但書」「法式」「脱党」「動産」「液体」「法人」「金額」「雇員」「特許」などがある。「但書」については、中国語辞書(東方書店)と「応用」には、名詞が載せられている。

(5) 日本語では名詞で、中国語でも名詞

一番わかりやすい語彙といえるだろう。この中で、98の「光線」と113の「政府」に関して陳(2001)で次のような説明がされている。「ここに挙げた「政府」「光線」も資料を丹念に検討すれば、和製漢語でないこ

とが証明できる」。これは注であるが、本文を見ると、「造語法の一つとして、宮島達夫は「外来の要素を日本で組み合わせてつくったものに、江戸末期から明治にかけて西洋近代文化の取入れにあたって作られたものが多い。『政府、哲学、光線』のようなのがそうである。」という引用文が見える。英華辞典を参考にしたのであっても、新しい概念を日本語に組み立てたものであるならば、和製漢語といえるだろう。たまたま、古漢語に同じ語彙が見られても、同じ意味で使われていないかぎり、古漢語を出典にしているとは言えない。

因みに、『現代漢語外来詞研究』に見られる、古典を出典にした語彙を抜き出してみると、次の50の語彙が挙げられている。

- |       |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1 意味  | 2 鉛筆  | 3 演説  | 4 階級  | 5 会計  | 6 改造  | 7 学士  | 8 課程  |
| 9 革命  | 10 環境 | 11 機械 | 12 機会 | 13 機関 | 14 議決 | 15 規則 | 16 教育 |
| 17 教授 | 18 共和 | 19 具体 | 20 計画 | 21 経済 | 22 芸術 | 23 經理 | 24 検討 |
| 25 権利 | 26 故意 | 27 抗議 | 28 講義 | 29 交際 | 30 交渉 | 31 構造 | 32 自由 |
| 33 住所 | 34 博士 | 35 表象 | 36 表情 | 37 風刺 | 38 物理 | 39 文化 | 40 文学 |
| 41 分析 | 42 文法 | 43 文明 | 44 封建 | 45 法式 | 46 方面 | 47 法律 | 48 保険 |
| 49 保障 | 50 労働 |       |       |       |       |       |       |

## 6 『現代漢語外来詞研究』と『漢語外来詞詞典』の外来詞

この両書は、収められている語彙にかなりの差が見られる。比較するために、語彙の一致率を見てみることにする。

### 6-1 外来詞の異同

『現代漢語外来詞研究』に掲載され、『漢語外来詞詞典』に掲載されていない外来詞

- |       |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1 場面  | 2 保健  | 3 支店  | 4 倉庫  | 5 話題  | 6 要点  | 7 文法  | 8 方面  |
| 9 住所  | 10 権利 | 11 機会 | 12 構造 | 13 共和 | 14 政治 | 15 手段 | 16 主席 |
| 17 美学 | 18 傍証 | 19 代数 | 20 伝票 | 21 電信 | 22 動向 | 23 導体 | 24 学期 |

25学齡 26議案 27軍事 28偏見 29法則 30意志 31条件 32蒸氣  
 33海事 34潰瘍 35金庫 36瀝青 37歴史 38領域 39算術 40政府  
 41商品 42職員 43主権 44主任 45体積 46鉄道 47特徴 48要衝  
 49財務 50材料 51財政 52講義 53概論 54意図 55提案 56三角  
 57曹達 58電力 59定額 60意味 61義務 62数学 63作戦 64遊撃  
 65互惠 66仮死 67服従 68説教 69出席 70退却 71停戦 72交渉  
 73断交 74伝播 75破産 76蒸発 77交流 78休戦 79対応 80投票  
 81特約 82調整 83複写 84復習 85破門 86克服 87認可 88執行  
 89侵害 90処刑 91総計 92体験 93分析 94風刺 95改造 96支持  
 97調整 98代理 99迫害 100批判 101放送 102自白 103蒸留  
 104改良 105改善 106管理 107管制 108局限 109供給 110免除  
 111緑化 112請願 113侵食 114消毒 115即決 116総合 117提供  
 118偵察 119予約 120停止 121展開 122解散 123表演 124例外  
 125表情 126反映 127作用 128表現 129希望 130命令 131連想  
 132請求 133申請 134経理 135検討 136領会 137断定 138判断  
 139保釈 140保証 141仮設 142説明 143試験 144対比 145展望  
 146解決 147交易 148集合 149接近 150進歩 151公開 152個別  
 153共同 154初步 155唯一 156法定 157無機 158積極 159対称  
 160有機 161特殊 162故意 163絶対 164内用 165方式 166脱党  
 167雇員 168特許 169距離 170電業 171法科 172出訴 173得数  
 174特別

6-2 一部分が掲載されているもの(『漢語外来詞詞典』)

1 新聞(新聞記者)    2 自然(自然淘汰)    3 流行(流行病, 流行性感  
 冒)    4 自治(自治領)    5 教育(教育学)

6-3 語彙の一致率

総数 388 のうち、未掲載の語は 174, 49 % の語彙が掲載されていない。  
 反対に 51 % の語彙が一致していることになる。約半数となる。

## 7 『現代漢語外来詞研究』と『漢語外来詞詞典』の著者

『漢語外来詞詞典』の序言に書かれていることを頼りに誰が執筆に関わったかを見ると、『現代漢語外来詞研究』にも『漢語外来詞詞典』にも劉正琰が携わっていたことが分かる。どうして、後から出版された辞書に、前回発表した語彙を取入れなかったのだろうか。その辺のところはよくわからない。序言の中には、両者についての比較や説明はなされていない。

陳(2001)が、「その後、この話題は中国でもホットで、『漢語外来詞詞典』(上海辞書出版社, 1984)には、八百ぐらいの日本由来の言葉を登録させたが、上のように英華辞典や英和辞典をしっかりと調べれば、その認定を覆す語はかなりの数に上るであろう。」と述べているように、『漢語外来詞詞典』のすべてが正しい日本由来の言葉であるかは、さらに検討が必要になる。特に、日本で辞書が作られる段階で、英華辞典を参照していたことから、中国で既に翻訳されていた中国語であったものは、和製漢語からは除く必要がある。

史有為(2004)『外来詞——異文化的使者』の増訂自叙を見ると、史有為(2000)『漢語外来詞』は総まとめとして出版されたようだが、今問題にしている、『現代漢語外来詞研究』と『漢語外来詞詞典』についての、内容の比較についての説明はない。

少し中を読んでみると、十三 日語漢字文化的倒灌(257～268ページ)があり、その中で「有的則已經引進，並成為現代漢語常用的詞匯，但在當時却僅限於介紹，並非真正的外來詞」と述べ、当時既に紹介されていて、現代常用漢字になっているものでも、当時はただ紹介しただけで、本当の外來語とはいえないと言っている。同じ例として、「社会、国体、立憲政体、国旗、共和、封建制、国会、議員、政党、などがあげられており、その中に、「參觀」もはいっている。ただし、「参看」と「参照」は入っていない。

## 8 改めて「参考」「参照」について

「参照」は、飛田良文は『明治のことは辞典』で、和製漢語に入れているが、この辞書に、「参考」は入っていない。

「参考」について捜してみると、『江戸時代 翻訳日本語辞典』の中に入っている『英和対訳袖珍辞書』初版本[影印](1862)に見つけることができた。

Contemplation ヲ作ル、参考スル、熟思スル Contemplative 雛形、視察、穿鑿、参考、熟思 Contemplatively 道理ヲ穿鑿スル、参考スル、熟思スル Contemplator 穿鑿シテ、参考シテ、熟思シテ、これらの記載が見られる。

現代の英和辞典では、Contemplation は静観、沈思の意味で、名詞。Contemplative は、静観的などという意味で、形容詞。Contemplatively は、沈思黙考してという意味の副詞。Contemplator は静観者の意味の名詞である。

「熟思」と「参考」は、現代の意味では、異なるし、品詞から見れば、名詞を副詞や動詞に訳しているところに問題があるかもしれないが、確かに「参考」の訳字が見られる。

一方、『漢語外来詞詞典』をみると「参観」「参看」「参照」は入れているが「参考」はない。『現代漢語外来詞研究』では、「参」から始まる語彙は、何も入っていない。

仮に、「参照」が後から作られた新漢語だとして、何時ごろ作られ、使われだしたのだろうか。試みに、『明治期漢語辞書大系』の索引を利用して、「参考」「参照」に当たてみると、次のような意味が辞書に載っている。

### 《参考》

『漢語字類』108 ページ 参考 アハセカンガヘル 明治2年

(1869)

『必携熟字集』161 ページ 参考 アハセカンガヘル 明治12年(1879)

『新編漢語辞林』174 ページ 参考 テラシアハセ, カンガヘル 明治37年(1904)

# 《参照》

『必携熟字集』161 ページ 参照 マジヘテラス 明治12年(1879)

『新編漢語辞林』174 ページ 参照 同上(参考のすぐ後にある)明治37年(1904)

「参照」は、『漢語字類』には収録されていない。これらから、「参照」が明治2年発行の『漢語字類』には載っていないことがわかる。また、明治37年の『新編漢語辞林』では、「参考」「参照」の意味が等しくなっており、明治12年の『必携熟字集』に載っている、意味(交えて照らす)と異なることがわかった。纏めると、「参照」が「参考」より新しいこと、「参照」の意味には変化があったことがわかる。『明治のことば辞典』では、明治24年出版の『言海』に載った「アチコチ, テリアハスルコト」を最初の例としてあげているが、『必携熟字集』が明治12年出版なので、この部分は、訂正が必要となろう。

ここで、節用集の例と、『新言海』の意味を見てみよう。

『節用集大系・翻字集』49-1 (『大豊節用寿福海』「参学」「参詣」「参宮」「参列」)

『新言海』大槻文彦(昭和34年1959)では、両者とも名詞である。

「参考」(名) まじえかんがえること。種類の物事を見合わせ聞き合わせて考え正すこと。また、そのもの。

「参照」(名) 参(まじ)えててらしあわせること。読物・諸事を見合わせる。

『和漢雅俗いろは辞典』(明治22年)では、「参考」が名詞と他動詞、「参

照」は他動詞である。「参考」さんかう(名)。－する(他) 参考, あはせか  
 ながふること, 参照, 参看「参照」は, 「参考」の意味の説明文に使われ  
 ており, 辞書の見出し語としては, 「さんせう」で取られ, 「さんせう(す  
 る)(他) 参照, かがへあはせる」という説明がある。

この辞書は, 明治 22 年の出版であり, 辞書の最後に当時の一般の評価  
 がつけられている。

「今や日本字引ヲバ, 日本人ノ為メニ, 日本人ノ手ニ依テ, 学理的ノ方  
 式ニヨリテ著述シタルハ, 即チ斯ノ[いろは]辞典ヲ以テ始メトス,」とある  
 ように, 当時としては, 画期的な辞書の出現だったと思われる。この辞書  
 には, 「参考」「参照」はどちらも見出し語になっている。

『日本語辞典』昭和 49 年(1974)(小学館)を引くと, 「参考」は, 出典に,  
 俳諧・去来抄－修行「面影の事支考も書き置かれたり。参考せらるべし」  
 と, 「文明論之概略」〈福沢諭吉〉緒言「諸書を参考して趣意の在る所を探  
 り」と, 「吾輩は猫である」〈夏目漱石〉二「参考の為め一寸聞いて置きた  
 いが」が引かれている。「参照」には, 何も引用はない。

『明治期漢語辞書大系』の 15 巻『新撰字類』(明治 8 年 1875)には, 「参與」  
 「参議」「参仕」が収められている。同じく 25 巻『大全漢語便解』(明治 9  
 年 1876)には, 「参朝」「参内」「参謀」「参與」「参仕」「参勤」「参考」が収  
 められている。さらに, 『普通漢語解』(明治 11 年), 『文明いろは字引』(明治  
 10 年), 『自由塾自在』(明治 11 年 1878), 『新撰伊呂波節用』(明治 12 年 1879),  
 『新撰伊呂波字引』(明治 12 年 1879), などを見ると, 先ほど見た明治  
 12 年の『必携熟字集』に載っている「参照」が, 初出のものとなる。少  
 なくとも, 今回見た辞書だけに限ればそのように言ってもよい。ただし,  
 辞書に取られるまでには, 実際に使われた時期とのズレを考える必要があ  
 るだろう。時代を追って, 辞書を引いていくと, 『必携熟字集』以後, 「参  
 照」の単語は出てこない。例えば, 『漢語伊呂波字引』(明治 22 年 1889)に  
 は, 「参朝」「参内」「参仕」「参謀」「参與」「参議」「参事」「参政」「参

考」「参酌」「参勤」「参賀」「参観」「参拝」「参堂」「参館」「参殿」が見られるが、「参照」は出てこない。10年後の辞書にも見えない単語が、『必携熟字集』には載っていたということになる。

さらに、偶々手にした『廣益いろは早引大全』(明治38年再版印刷)(著者関谷男也)を引いてみると、303ページに「サ」がある。全部で「参与」「参賀」「参朝」「参内」「参拝」「参詣」「参堂」「参謁」「参謀」「参観」「参会」「参着」が入っている。この中には、『熟語大辞林』(明治34年)にも入っていない「参着」が入っている。

同じく、54巻『熟語大辞林』(明治34年1901)山田武太郎(美妙)編には、「参考」「参照」(注は「参考」)が見られる。

では、国定教科書では、「参考」や「参照」はどのくらい入っていたのだろうか。『国定読本用語総覧』(三省堂、1997)の第二期に「さんこう」が見られ、「……此の際其道の専門家の講話を承るは、大いに参考に相成るべしと存候。」という用例が見られる。同じく、第四期には、「さんこうしょ」があり、「参考書が見たければ、三階の図書室にありますよ」が載っている。

第一期には、「参考」もあがっておらず、「参照」は、第六期にも出てこない。第一期は、明治37年から使用、第二期は、明治43年から使用、第三期は、大正7年、第四期は、昭和8年、第5期は、昭和16年、第6期は、昭和22年から、使用の教科書である。「参考」は第二期の例一つで、「参照」はすべてに取られていない。

内容が前後するが、『現代漢語外来詞研究』では、「参考」「参照」とも取り上げられていない。『漢語外来詞詞典』では、「参観」「参看」「参照」が取り上げられている。

王立達(1958)「現代漢語中從日語借来的詞彙」には、「参考書」は取られているが、「参考」「参照」はない。また、鄭奠(1958)「談現代漢語中的“日語詞彙”」には、日本語からの借用語とされている、「権利」「文法」「歴



史」「倫理」「心理」「積極」などの詞は、出典が古漢語にあるとして、日本語からの借用語ではないとしている。根拠が示されているのは、「權利」と「文法」である。

「權利」に関しては、朱京偉(2003)『19世紀以降の中日語彙交流と借用語の研究』にも鈴木修次(1981)の例が載っており、そこには、「權利」が挙げられている。

1958年2月の『中国語文』に載せられた論文に、王立達「現代漢語中従日語借来的詞彙」で取り上げた単語(其於、關於、對於、由於、認為、成為、視為)に対して、1958年6月号において、張應徳「現代漢語中能有這麼多日語借詞嗎?」が、借用語ではないと批判した。

これに対して、1958年9月号の『中国語文』で、王立達は、

因為這些詞從來源上說雖然与日語有直接關係，但因它們是我國人翻譯日文時創出來的，是從日語中借用來的，所以按其性質來說，應當是意識詞而不是外來詞。我把它們列為日語借用的一項，是完全錯誤的。

と述べ、中国人が日本語を翻訳するときに作り出した語を、借用語の中に入れたのは間違いだとしてはずしている。これまで、筆者は語彙だけの流入を考えて借用語を考えてきたが、こうしてみると、借用表現も、中国には入っていたことになる。

ある語彙が借用語であるかということについては、簡単には結論は出せない。中国に出典があれば、日本に当時、既に入っていて、日本でも長く使用されていたという可能性は否定できない。日本では、使われていなかったと説明できて、初めて、日本製の漢語でないといえるだろう。

となると、「参考」「参照」を考えるにおいても、「参考」が中国に出典を持つ単語であり、また、日本語の中で、使用されていたとなると、新しくできた語彙ではなく、既に、日本でも、中国でも使われていた単語となる。つまり、中国の古典に既に出典があり、去来抄の中に使われ、英華辞典の訳語に登場し、動詞で使われながら、徐々に名詞用法が定着してきた

と思われる。

「参照」は、どこに出典があるかという点、小学館の『日本国語大辞典』には、出典はない。『漢語大詞典』(1993, 上海辞書出版社)には、「参考」の出典として、『漢書・息夫躬伝』、宋蘇軾などの例が挙げられている。また、「参照」の例としては、

宋趙彥衛《雲麓漫鈔》卷十：祥符間禁沈義倫本，自後沈本難得，今亦時見之，可以参照。

魯迅《花邊文學・漢字和拉丁化》：先是不懂，硬着頭皮看下去，参照記事，比較對話，後來就懂了。

巴金《家》三十：他還把這個意見向老太爺報告，並且参照父親的意思似了一些具體的辦法。

以上の3例が載っている。宋の時代に既に用例があるが、使われているのは、魯迅と巴金の文中である。「参考」に比べて、新しい語彙だと考えられる。

## 9 「日中対訳コーパス」の翻訳例

次に、北京大学日本語センターの作成した、日中対訳コーパスを使って、「参考」「参照」がどのように、中国語に訳されているのかを見てみたい。日本文、中国文の順序で列挙する。

《夏目漱石『坊ちゃん』》

【例文1】 // すると赤シャツはそれじゃ昨日の事は君の参考だけにとめて、口外してくれるなど汗をかいて依頼に及ぶから、よろしい、僕も困るんだが、そんなにあなたが迷惑ならよしましようと思ひ合つた。

【例文2】 事實は既に諸君の御承知の通であるからして、善後策について腹藏のない事を参考の爲めに御述べ下さい。

「それじゃ、昨日のことは君の参考だけにとめて、」を「只供你参

考」,「只供你参考」,「仅供参考」に訳している。

この例は、あなたの「参考」に供すると読め、名詞の可能性がある。

「参考の為に御述べ下さい」を「以供我参考」「为了参考各种意见,」「以作参考。」に訳している。

「我」が入っている文は、名詞,「各種意見」のある文は、他動詞。ただ,「以って参考となす」に読める文は、名詞と判断する。

《夏目漱石『こころ』》

【例文3】「宅へ帰って一つ父に談判する時の参考にしますから聞かして下さい」

「作个参考」に訳しているのは、名詞と見てよいだろう。同じように,「做个参考」も名詞の使い方だと考えられる。

《島崎藤村『破戒』》

【例文4】「種々な字典を参考するやら、何やら——そりゃあもう、君」

【訳文4】「查阅了各种各样的字典,你说容易吗?好在讲完了。」

この例文に載っている「参考」は、訳文では「参考」を用いていない例となり,「查阅」の動詞で代用し,「参考」の意味を含ませている。

《夏目漱石『こころ』》

【例文5】その中から貴方の参考になるものを御攫みなさい。

【訳文5-1】从中选择对你有益的东西吧。

【訳文5-2】从这里边抓住可以供你参考的东西。

この訳文は,「有益」で置き換えたものと,名詞の「参考」と考えられる。

【例文6】だからこれから発達しようという貴方には幾分か参考になるだろうと思うのです。

【訳文6-1】因此我想,对于即将踏入社会的你来说,是会有几分参考价值的吧。

【訳文 6 - 2】所以对于要在今后有所发展的你，我想也许有几分参考价值吧。

これらの訳文は、「価値」を修飾し、参考するところの価値という意味で、「的」を補って使えるかもしれない。

《井伏鱒二『黒い雨』》

【例文 7】その点を御納得のほど願いたく、御参考のため嘗て義弟の草せし手記を取寄せて別送仕り候。

【訳文 7】对此，望能鉴察。为供参考，拟将内弟所书之笔另记行寄上。

「参考」に供すると読める。名詞だと考える。

【例文 8】この手記を院長先生に治療の参考にしてもらうと云って持って行った。

【訳文 8】把这笔记带给了院长先生，供他作治疗的参考。

この例は、これまでにない。「～的参考」の形をとり、これは名詞だと思われる。

《夏目漱石『こころ』》

【例文 9】私は彼の眼遣を参考にしたかったのですが、彼は最後まで私の顔を見ないのです。

【訳文 9 - 1】我想再看看他的眼神，他却一直没有抬起头，

【訳文 9 - 2】我想看看他的眼色作为参考，他却直到最后没有朝我脸上看一下

【訳文 9 - 1】では、「参考」の字は使わず、目遣い、つまり眼差しを見たいという表現の中に「参考」の意味を含めている。しかし、【訳文 9 - 2】では、「作為参考」になっており、これは名詞と考えられる。

《『心の危機管理術』》

【例文10】同じような状況の中にいるビジネスマンの方々の参考になればと筆をとった次第である。

【訳文10】若这些感受能对处在相同情况下的职员有所参考的话，那该……。

この「参考」は動詞。

これらの例文と訳文を見てみると、幾通りもの表現がある。一般の辞書で、中国語の意味は動詞であることを考えると、動詞の名詞化という現象だと考えても、良いかも知れない。

次に「参照」の例を「参考」と同じように、「中日対訳コーパス」を使ってみてみよう。

《『心の危機管理術』》

【例文11】（イライラ・クヨクヨを吹き飛ばす日新報道刊・参照）

【訳文11】（请参阅登在“日新报导刊”上的“驱散焦躁和烦恼”一文）  
《『百言百話』》

【例文12】厭でも真先に読み返し参照して、痛棒を受けるべき名篇  
「思想の運命」において

【訳文12】不管你是否讨厌，也许首先值得参考阅读的就是这篇曾经受到严厉指责的《思想的命运》。

「参照して」を「参考閱讀」と訳し、動詞。

《『マッテオ・リッチ伝』》

【例文13】次に（三）リッチのイタリア語訳を参照して文意の説明、  
筆者の感想などを書き加えることとした。

【訳文13】（三）最后，参照利玛窦的意大利语译文对文章的意思进行解说，并加进一些笔者的感想。

「参照して」を「参照」に訳し、動詞だと思われる。

《『適応の条件』》

【例文14】（『タテ社会の人間関係』講談社・一九六七年を参照されたい）。

【訳文14】（参见《纵式社会的人际关系》）。

「参照されたい」を「参見」と訳し、品詞は動詞。語彙が参見。

以上、見たように、『坊ちゃん』『破戒』『こころ』『黒い雨』『砂の女』『斜陽』『友情』『日本経済の飛躍的な発展』『心の危機管理術』『タテ社会の人間関係』において、「参考」が使われているのは、今見た数例のほかそれほど多くはなく、「参照」の例は、さらに少ない。しかし、Googleで検索すると、「参照」には、様々な用例が出てくる。

例えば、「～ページ参照」「参照した」「参照方法は」「参照コードの」「参照してしまう」「以下を参照のこと」「参照条文」「参照ページ」「参照してほしい」「参照ください」まで、実に多彩である。これらを見ると、徐々に、日本語の「参照」が名詞化されてきているのを感じる。このような現象は、メールという媒体と、関係があるのかもしれない。

『吾輩は猫である』が、「中日対訳コーパス」にないので、ここでは、比較の対象にならなかったが、ほかの例からも、漱石や藤村が、「参考」を「参考のため」と言い表し、「参考すること」の意味で、名詞扱いし始めたことがわかる。小学館国語辞典に取られている用例とは異なるが、この時期に、「参考」の名詞的用法が生まれたと考えても良いだろう。漱石は、漢詩を自分でも作っていたというから、「作為参考」から、「参考の為」が想起されて、小説に使用された可能性が考えられる。

一方、「参照」については、使用例が小説などの文学においては、少なかったと言える。単語の性質とも関わるのだろう。「参照」スルという形をとり、「～スル」の動詞で使われ、文末におかれるときも「……参照」で現れ、「……を参照されたい」という意味で使用されている。これらの例では、名詞用法は見られなかった。成り立ちを考えれば、明治の初めから12年頃までの間に作られた「交えて照らし合わせる」を表わす造語だったと考えられる。それを考え出したのが誰であるかは、特定できないが、中国文献に出典はあるにしても、この使われ方が、中国語の古典を直接、参考にしたとは考えにくい。そのため、日中両方で、それぞれが考え出し

た漢語であると考ええる。

## 10 まとめ

『現代漢語外来詞研究』にとられている日本からの借用語とされている語彙の中には、既に英華辞典などに採用されていた単語などがあり、検討を要するものがある。しかし、取られた語彙を品詞で分類すると若干の特徴が見られた。特に、中国語で、非述形容詞とされる語彙は、形容詞だけに品詞が限られるものに見られ、その中で、「消極」だけは、一般形容詞として使われている。『現代漢語外来詞研究』と、26年後に出た『漢語外来詞詞典』とを比較すると、収録語彙の一致率は、約半分である。借用語の判断基準に違いがあると、当然のことながら、採用される語彙の量に差が出ることは十分に考えられることではあるが、ここまで一致しないという事は何か別の要因が考えられるのかもしれない。1958年、1959年にかけて、その基準について論争があったが、その時の論争が借用語を考えるきっかけとなったのだろう。最近出版された、馮天瑜『新語探源』と史有為『外来詞——異文化的使者』の両書により、外来詞について、考え方が違う学者が多くいることがわかる。語彙の歴史や運用の性質など細かに検討しない限り、たとえ一つの単語でも、簡単に借用語であるとは言えない。これまで、日本からの借用語とされてきた語彙が、一人歩きしないうちに、訂正の必要のありそうな語彙から、その歴史をたどる必要があるだろう。

陳(2001)では、「日中間の品詞の違いは基本的にはそれぞれの言語の特徴に位置づけられており、問題にする意味が薄いことになる。」と述べている。しかし、誤用を生む原因を見つけるには、日中対照研究は有効な手段だと考える。日中対照研究で原因を考え、対策を共有し、その情報を提供することで、日本語教育への応用が考えられる。

（追記）本稿は、2005年6月4日の「日中対照言語学会」(第13回大会)での発表要旨に、加筆したものである。

### 参考・参考文献

- 高名凱ほか（1958）『現代漢語外来詞研究』文字改革出版社  
 （1958）（1959）『中国語文』  
 （1969）『明治文化全集 別巻 明治事物起原』日本評論社  
 南信一（1975）『総釈去来の俳諧（下）去来抄』風間書房  
 杉本つとむ編（1981）『江戸時代 翻訳日本語辞典』早稲田大学出版部  
 鈴木修次（1981）『日本漢語と中国』中公新書 626, 中央公論社  
 劉正琰ほか（1984）『漢語外来詞詞典』上海辞書出版社  
 惣郷正明・飛田良文編（1986）『明治のことは辞典』東京堂出版  
 森岡健二（1987）『語彙の形成』明治書院  
 王力（1990）『王力文集 第11巻』山東教育出版社  
 沈国威（1994）『近代日中語彙交流史』笠間書院  
 松井栄一ほか（1997）『明治期漢語辞書大系』大空社  
 （1997）『国定読本用語総覧』三省堂  
 陳力衛（2001）『和製漢語の形成とその展開』汲古書院  
 朱京偉（2003）「19世紀以降の日中語彙交流と借用語の研究」『日本学研究第12期』世界知識出版社  
 曹煒（2003）『現代漢語詞彙研究』北京大学出版社  
 加藤二郎（2004）『漱石と漢詩』翰林書房  
 馮天瑜（2004）『新語探源——中西日文化互動与近代漢字述語生成』中華書局  
 史有為（2004）『外来詞——異文化的使者』上海辞書出版社  
 周荐（2004）『漢語詞彙結構論』上海辞書出版社  
 中日対訳コーパス（北京大学日本語センター）